書 評

世界を共有する：翻訳するということ

書評：山本史郎. 2020.『翻訳の授業：東京大学最終講義』東京：朝日新聞出版.

愛知県立大学大学院国際文化研究科日本文化専攻博士前期課程
小柴桃歌

『赤毛のアン』、『オリエント急行殺人事件』、『ホビット』。これらの海外作品を、現在では翻訳作品として当たり前のように読むことが可能である。しかし、そもそも翻訳とは何か、どのような翻訳が良い翻訳と言えるのだろうか。

本書は、イギリス文化を専門とする英文学者、翻訳者であり、東京大学名誉教授、昭和女子大学特命教授（刊行当時）である著者、山本史郎が三十年以上にわたって東京大学で研究し、教えた英語や翻訳について知り得たことを、自身の最終講義の内容に加えて執筆したものである。

本書は「はじめに」、第一章から第八章、「あとがき」から構成されている。

「はじめに」では、I wish I knew.をあなたならどう訳しますか。という問いかけから始まり、文法的に正しく訳すよりも、日常的なことば、生きたことばに訳すべきだと著者は主張する。翻訳とは何か。この疑問を論理的に掘り下げていく、という本書を執筆する著者の姿勢が述べられる。

第一章「『雪国』の謎」では、世界的に有名な川端康成の『雪国』の冒頭、詩的味わいの深い散文の翻訳を例に、現在の翻訳論となるひとつの解釈例、逐語訳、詩的表現の訳の紹介がなされる。

第二章「『同化翻訳』と『異化翻訳』」では、二つの翻訳論が提示される。現代の英米でスタンダードな翻訳は「同化翻訳」であり、他の文化の作品を自らの文化の中に取り組んで翻訳し、最初から英米人が書いたかのように読むことができるものである。反対に、明らかに翻訳であることが分かるように、オリジナルの言語の言い回しや構文が見えるように訳すのが「異化翻訳」である、と本書には書かれている。

第三章「視点と語り」では、作品を翻訳するとき、語り手の視点を変化させることによって、情報が整理され、原作では語られなかった個人の感情が入り込んだり、切り捨てられたりし得るとされる。視点の変化はうまく使うことで、読者を惹きつけることのできる文章に翻訳することが可能であると著者は述べる。

第四章「実用と文学のはざま」では、実用テクストは、必要な情報を伝えるという目的が達せられるなら、伝達手段は問題ではなく、AI による翻訳も可能となるが、文学テクストとなると文体そのものに意味があり、形そのものがテクストの意味や価値と不可分になっているため、伝え方も重要になる、と論じられる。著者は、今後の翻訳研究の中心は文学テクストとなること、より根本的には「文学的」な言語の使い方とは何かを探求していく方向に向かうことを予想する。

第五章「岩野泡鳴と直訳擁護論」では、原作の言語を重視する起点言語主義と、翻訳され

る言語に重点を置く目標言語主義について論じられる。前者を擁護する人々は、英語と日本語で、単語は一対一に対応し、英文法が世界を分節する絶対の法則であることが「公理」だと考えていた。しかし、著者はこの考えに反論する。辞書も文法書も人間が作ったもので、永遠に不完全な道具であるから、翻訳者が頼りすぎるべきではない、とその根拠を述べる。

第六章「翻訳家の仕事場」では、著者の翻訳論に大きな影響を与えた『ホビット』を例に、著者の翻訳論が述べられる。「書かれた文字」ではなく「文字」として表現される前に存在していた意味、「意味空間」を再現しようというのが著者の翻訳論である。これは意味のコミュニケーションを「公理」とした翻訳法であり、意味を尊重しながら日本語としての正しい意味の流れを創造していく。

第七章「翻訳と文体」では、文学作品を翻訳する場合は、「意味空間」を正確に再現して的確に表現すべきだけでなく、文体的特徴のうち、目立った特徴を捉えたうえで、比較的に重要度の低い特徴は切り捨てる思いきりも必要であると著者は主張する。

第八章「翻訳革命」では、著者のこれからの翻訳に対する展望が述べられる。著者は作品の意味、作品の「世界」に重点を置いている。そして、原作の「世界」を再現する翻訳こそ、本来の翻訳であると主張し、これからの翻訳研究の進歩に期待を述べる。

「あとがき」では、他言語の文章が日本語の文章となり意味が通じることの不思議が、著者が三十年以上も翻訳を研究する動機になったと書かれている。

翻訳とは何かについて詳細に論じた本書の中、特に重要だと思われるポイント、翻訳方法は以下のふたつにまとめられると評者は考える。

ひとつめは、原作の文体や音韻自体も作品そのものであると考え、「書かれた文字」に忠実な翻訳である。ふたつめは、著者が主張する「文字として現される前に存在していた意味」つまり「意味空間」を重要視する翻訳である。

「書かれた文字」に忠実な翻訳は、起点言語主義の典型である。日本では明治から大正にかけての小説家である岩野泡鳴と、1883 年生まれの英文学者である野上豊一郎が、その代表として紹介される。彼らにとっての翻訳は、意味が通じることではなく、英語の口調や姿勢を保つことであった。もとの英語の形には、単なる「意味」以上の、何か素晴らしいものが含まれていて、それを読者がきちんと味わうことが重要だと考えられていた。

二十世紀前半を代表するドイツの哲学者ヴァルター・ベンヤミンも「書かれた文字」を尊重した一人であり、そのために逐語訳の必要性を説いた。翻訳とは純粋言語を志向すべきものであり、翻訳家の仕事は、バベルの塔崩壊以前の、神と人類が幸せな関係にあったころに存在したひとつの言語を目指すことであるとする。この考えから、深い信仰は逐語訳を要請することにつながる、と本書には書かれている。例えば、もともとヘブライ語で書かれた『旧約聖書』を翻訳すると神の言葉から距離ができてしまう。神の言葉に近づくために、もとの言語に忠実な翻訳が要求されたのは必然だった。

「書かれた文字」に忠実である翻訳は「書かれた文字」そのものに意味を見出していた。

しかし、著者は「書かれた文字」ではなく「意味空間」を重視し、作品の「世界」を再現することが翻訳である、と主張する。

> 翻訳とは言語レベルの置き換えではなく、コミュニケーションのレベルの転換である。
> そして、コミュニケーションとは、作者と読者が「世界」を共有する「出来事」である。

(p.188)

本書を通して読むとこの主張は理解しやすいだろう。

まず「世界」となる「意味」があり、「出来事」となる「言語」がある。「意味」を伝達するために「言語」が用いられ、その言語固有の文法形式や語彙が選ばれて発話がなされる。

本来の翻訳という行為は、原作の作者が頭に描き、伝えようとする「世界」を別の言語で忠実に再現することであり、読者の頭の中で再構成できる限りにおいてのみ意味があると論じられている。「意味」があって「言語」が必要となるからこそ、文体的に目立った特徴は捉えながら、翻訳は言語の文法や語彙的対応よりも、その文章が形成している「世界」を読者の頭の中で再構成されるようにすべきだ、と著者は結論付ける。

海を越え、言語の違いを乗り越え、地球上の人々と「世界」を共有することができるのは、作品の「世界」を共有した翻訳のためである、と明らかに論じたことは、多くの読者をひきつけるであろう。

本書は、著者が東京大学で行った講義をもとに書かれているため、専門的な言葉の解説も詳しく、全般として読みすい。谷崎潤一郎、村上春樹、マーク・トウェイン、ウィリアム・シェイクスピアなど、その名が広く知られた作家たちの作品の例も多く出されている。読者を教室の席に座り、まさに今、目の前で山本が講義をしているような「世界」へと誘い込み、さらなる発展を予見される翻訳とは何かについて学び、自分自身で考えるきっかけとなる好著である。